

# 植物成長調整剤（フィガロン乳剤）の効果確認

## 1 情報・成果の内容

### (1) 背景・目的

‘輝太郎’の有利販売を狙った出荷時期の前進化が求められているため、熟期促進対策としてフィガロン乳剤の効果を確認した。また処理により葉が下向きに垂れることから、葉スレや汚損等の助長が懸念されるため、強摘葉区を設けて調査を行った。

### (2) 情報・成果の要約

- 1) フィガロン処理を行うことで、‘輝太郎’の熟期を促進させる効果がみられた。
- 2) 処理を行うと葉が下向きに垂れることから、葉スレや汚損等の助長が懸念されたが、収穫が早い時期は果面障害の差はみられなかった。

## 2 試験結果の概要

- (1) 処理方法 使用時期は満開 70~80 日後およびその 15~20 日後（2 回散布）  
フィガロン乳剤 5,000 倍液を葉先から葉液が滴る程度に全面散布
- (2) 9 月 27 日の果実調査では、フィガロン処理区は果色が進んで糖度が高くなり、硬度は低くなった。処理区内で比較すると、強摘葉区の果重と糖度は、慣行摘葉区より低くなった。10 月 4 日の果実調査でも、9 月 27 日と同様にフィガロン区の果色が進んで硬度は低くなった（表 1、表 2、図 1）。
- (3) 外観品質については、9 月 27 日の調査では試験区間で差が認められなかった（表 3）。10 月 4 日の調査では、フィガロン処理を行った強摘葉区の汚損果発生率が低く、フィガロン処理の慣行摘葉区で裂皮果発生率が高かった。その他の外観に差はなかった（表 4）。
- (4) 1 回目のフィガロン処理以降、葉が下向きに垂れ、そのまま回復しなかった（図 2）。また、9 月 27 日の収穫前にフィガロン処理区で裂皮やへたすきなどによる軟果が散見されたが、対照区ではみられなかった。

表 1 フィガロン処理および摘葉が‘輝太郎’の果実品質に及ぼす影響（2022 年 9 月 27 日）

試験区	果重 (g)	果色 (オレンジ C.C.)		糖度 (%)	硬度 (kg)
		果頂部	へた部		
フィガロン+強摘葉区	338 b <sup>z</sup>	8.7 a	4.6 a	15.7 b	1.2 b
フィガロン+慣行摘葉区	362 a	8.6 a	4.3 a	16.2 a	1.2 b
対照区	330 b	7.8 b	2.8 b	15.1 c	1.4 a

z : Tukey-Kramer's HSD test により同列内の異符号間に 5%レベルで有意差があることを示す。

表 2 フィガロン処理および摘葉が‘輝太郎’の果実品質に及ぼす影響（2022 年 10 月 4 日）

試験区	果重 (g)	果色 (オレンジ C.C.)		糖度 (%)	硬度 (kg)
		果頂部	へた部		
フィガロン+強摘葉区	383 a <sup>z</sup>	8.0 a	7.0 a	16.8 a	0.9 b
フィガロン+慣行摘葉区	388 a	8.0 a	6.8 a	17.0 a	0.9 b
対照区	350 a	7.2 b	4.9 b	16.0 a	1.2 a

z : Tukey-Kramer's HSD test により同列内の異符号間に 5%レベルで有意差があることを示す。

表3 フィガロン処理および摘葉が‘輝太郎’の外観品質に及ぼす影響 (2022年9月27日)

試験区	発生率 (%)				
	汚損	スレ	条紋	裂皮	日焼け
フィガロン+強摘葉区	50.0 a <sup>y</sup>	54.0 a	20.0 a	20.0 a	22.0 a
フィガロン+慣行摘葉区	46.0 a	52.0 a	24.0 a	10.0 a	12.0 a
対照区	58.0 a	56.0a	28.0 a	24.0 a	20.0 a

y : Ryan's multiple test により同列内の異符号間に5%レベルで有意差があることを示す。

表4 フィガロン処理および摘葉が‘輝太郎’の外観品質に及ぼす影響 (2022年10月4日)

試験区	発生率 (%)				
	汚損	スレ	条紋	裂皮	日焼け
フィガロン+強摘葉区	68.0 b <sup>y</sup>	62.0 a	36.0 a	42.0 b	22.0 a
フィガロン+慣行摘葉区	88.0 a	54.0 a	34.0 a	66.0 a	24.0 a
対照区	86.0 a	48.0 a	26.0 a	35.2 b	20.0 a

y : Ryan's multiple test により同列内の異符号間に5%レベルで有意差があることを示す。



図1 収穫した果実 (上: フィガロン区  
下: 対照区 2022年9月27日)



図2 垂れ下がった葉 (2022年8月17日)

### 3 利用上の注意点

- (1) 2019~2022年の調査では、熟期を2~6日程度促進させる効果がみられたが、過去のポット樹や本場での試験では効果がみられない年があった。また、年次間差があるため、実施にあたっては各園で処理効果を確認してから使用する。
- (2) 外観については、試験区間で大きな差がみられなかったが、強摘葉を行うと果重、糖度が低下する傾向があったため、過度に摘葉しないよう注意する。
- (3) 果色が進んだ果実は外観が低下する傾向があるため、障害が出る前に収穫する。
- (4) 連年処理による樹勢への影響は確認していない。

### 4 試験担当者

河原試験地 試験地長 石河利彦  
 果樹研究室 研究員 稲本俊彦  
 河原試験地 試験地長 藤田俊二<sup>※1</sup>  
 河原試験地 試験地長 小谷和朗<sup>※2</sup>  
<sup>※1</sup>現 鳥取農業改良普及所普及主幹  
<sup>※2</sup>現 東伯農業改良普及所改良普及員